

自主独立

開校60周年 — 高知中央高等学校の沿革

高知中央高等学校は昭和38年（1963年）4月に開校し、今年60周年を迎えることとなりました。昭和37年に高知県知事にあてて提出された学校設置認可申請書には、設立の主旨が概略次のように述べられています。

「高知県では多年全員入学制を実施してきたが、進学率の格段の上昇の中、公立高校の収容定員の関係で高校へ進学できぬものが県下で1,000名近く出ている。昭和38年度以降は特に高知学区で普通科の施設設備の拡充が必要となる。又、経済界の発展で商業高校志願者の激増が必至で、商業教育の機会を与えることも緊要である。さらに、女子に対しての教育施設も貧弱であり、高校教育を受けず各種学校に通うものも多いことから、新時代に相応しい素養と実技を身につけた家庭人としての女子の教育を振興しなければならない。高校教育が知識偏重の弊に陥っていることから、知徳両面の教育を一層振興せねばならぬ。（要旨）」



(写真左:1965年頃 生徒の希望で学校の看板設置)



(写真右:1966年夏 寮からあぜ道を通って登校)

昭和38年普通科7クラス（355名）と家政科1クラス（49名）の1期生で開校し、翌年には商業科も設置されましたが、高校生急増のピーク時に学校創立となったため2期生は普通科4クラス、商業科1クラス、家政科1クラスで2クラスの減少、昭和40年入学の3期生は普通科3クラス、商業科1クラス、家政科1クラスで前年よりさらに1クラスの減少となりました。

昭和41年県内初の衛生看護科を開校し、その1期生の卒業にあわせて昭和44年衛生看護専攻科が私立学校では全国で初めて設置され、高校衛生看護3年と専攻科2年の5年で看護資格が取得できることから人気を博しました。しかし、昭和39年開設された中学校は年々入学生が減少したため44年をもって募集を停止しました。その後、昭和43年に発足した機械科が50年3月の卒業生を最後に幕を閉じ、

家政科も50年度募集停止、商業科は大学進学率上昇の中で普通科と合併するなど、時代に合わせた合理化を余儀なくされました。昭和51年度以降衛生看護科と普通科および衛生看護専攻科で運営されていたが、平成14年（2002年）衛生看護科は看護学科として新たに設置発足し、専攻科まで5年一貫となりました。



(写真上:毎年春には満開の桜が新入生を出迎える)

生徒数が466名と激減し廃校プログラムなるものまで計画されていた中で、平成15年12月に近森理事長が就任すると年々生徒数も増加して1,000名を超え、少子化と言われる現在も県下の私立・国公立高等学校の中では一番多い生徒数を有する学校となりました。

(令和5年5月1日現在910名)

令和5年度は普通科（16クラス）にスポーツコース、アントレコース、公務員コース、特別進学コースを置き、看護学科（5クラス）と看護学科専攻科（3クラス）で構成されており、「自主独立」の校訓のもと生徒のニーズに合った教育方針や進路を提案しています。

【令和4年度までの卒業生・修了生の総数】

● 中学校	200名	● 衛生看護科	4,075名
● 家政科	359名	● 衛生看護専攻科	1,981名
● 商業科	231名	● 看護学科高校課程	1,778名
● 機械科	126名	● 看護学科専攻科課程	1,411名
● 普通科	6,480名		